

「夢洲」の未来を考える
 続・生物多様性ホットスポット

文・写真 加賀まゆみ (理事・生物多様性推進委員会)



写真-1 埋立てが進む3区の池

白鷺の群れが六甲の山並みを背景に群舞し、ヨシ原に風がわたり、若ツバメたちがランダムに空を切っただけで遊ぶ。猛禽が何羽も空高く旋回し、時折急降下して水面ぎりぎりをかすめ飛ぶ。池には数百羽のカモが悠々と泳ぎ、干潟には幾種類ものシギ・チドリが盛んに動き回っている。夢洲に行ったことのない人は、おそらくそんな風景は想像できまい。

この夢洲はゴミを捨てるために作られた人工島である。目と鼻の先にある南港野鳥園は「東アジア・オーストラリア シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」として位置付けられている。渡り鳥たちは、南港野鳥園で餌をとり、広大な干潟・湿地が広がる夢洲でゆっくり羽を休める。昨年はツクシガモ (環境省/絶滅危惧II類) も来ていた。この間オニアジサシも見かけた。ここをそのまま自然創生すれば、大阪湾初のラムサール条約登録も夢ではないと思える。

だが、IR誘致及び万博開催地としての土地造成は急ピッチで進み、

「都市と自然」4-5月号に書いたような「このまま緩やかに人間の生活と共に育てていく」ことは、もはや望みようがなくなった感がある。私たち生物多様性推進委員会では、今後どのように夢洲を巡る活動を進めていくべきか、調査を続けながらも、現実と理想のはざままで結論を出せずにいた。

仮に万博IRが夢洲に来ないとしたら、夢洲にこのまま自然創生が許されるのだろうか。経済的利益を生まない、国際的に注目もされないゴミ捨て場となったら、あらゆる有害物質を受け入れるに違いない。その後、太陽光パネルだらけの島になるかもしれない。そんな悲観論が出てくるにおよんで、20年、30年先の夢洲に今まで同様の生物多様性が確保されるにはどうしたらいいのか、大阪湾岸の一部として都会の人間のライフスタイルと折り合って存在するためには、今私たちはどこをどう残してほしいか、具体的に要望していこうではないか、という考



写真-2 3区の池で見られるミサゴ(写真 磯上)

えにシフトしてきている。

夢洲の概略

夢洲は、大阪の家庭ごみ焼却灰・産業廃棄物・浚渫土砂などを埋め立て処分する人工島。ごみ焼却場のある舞洲とは夢舞大橋で、南港野鳥園のある咲洲とは夢咲トンネル (海底) とでつながれている。夢洲全体は390ヘクタール。甲子園約100個分。晴れた日には淡路島、明石海峡大橋、六甲山系、生駒山系、関空と、大阪湾がぐるり見渡せる。ここに2025年大阪・関西万博、そして2024年に前倒しでIRカジノの開業が計画されている。昨年協会の提出した要望書に対し、「生物多様性ホットスポットとして認識し、しかるべく環境アセスメントを行います」と回答した大阪市は、今のところなにも調査せず、4月からどんどん購入土砂を投入している。

夢洲の中は便宜上4区に分けられている。まずはこの区割りを頭に入れてほしい。



図-1 夢洲の区割りと現況(10.22市民集会実行委員会より提供)

4区(東側) = 夢洲への入場許可なしに入れるコンテナターミナル。15m以上の深さがある護岸に巨大なコンテナ船が横付けできるので、大阪の物流拠点となっている。すでに埋め立てを終え、コンビニが1軒ある。平日、夢洲の幹線道路は、荷を積載した、あるいは運転手が休憩しているコンテナ車で見事なまでに埋め尽くされている。

3区(北部・中央部) = 2区と共に港務局の入場許可が必要。IRカジノ建設予定地。7月大阪市はここを商業地に用途変更した。雨水のたまった広大な淡水池があり、時に数千羽の水鳥がいたという。今は埋め立てにより池の面積は半減したが、大雨が降るとまた水がたまる。周りには工事の車が土煙を上げているにもかかわらず、野鳥はのんびり休んでいる。

2区(南側) = 万博予定地。1月には全体がほとんど沼だった。シギ・チドリが憩う湿地ができています。現在急ピッチで土砂が投入されてい

るが、万博では半分近くを「ウォーターワールド」として水たまりのまま利用する計画だ。先に陸地になっていたところは大規模なヨシ原ができていたが、そこも伐採され開発が進んでいる。

1区(西側) = 「大阪市・八尾市・東大阪市」合同の環境事業組合の入場許可が必要なエリア。家庭ごみ・焼却灰を埋め立てているため、地中のメタンガス抜きパイプが突き出していて、においも粉塵も多い。灰の上に砂利を敷くので、ここにコアジサシ (環境省/絶滅危惧II類(VU)) やコチドリなどが繁殖していたとみられる。(コアジサシは営巣が確認された場合工事を止めなければならない)。埋め立てが終了したエリアには太陽光パネルが設置されている。この1区は「特定有害物質による汚染土壌」が含まれるため、将来的にも「グリーンテラス」として人間は居住できないようにする予定だったと聞く。しかしこれも万博予定地に一部組み込まれ



図-2 大阪市湾岸の地図



写真-3 大阪港全景 西から東(大阪市港湾局,2018年)

た。海沿いには塩性湿地が偶然できていて、希少な水草が生え、ヌートリアが棲みついている。

夢洲の生きもの

私たちは許可を得て、6、7月に6回、地球環境基金の助成を受けたワークショップとして簡単な生きもの調査を行った。1回の滞在はわずか2～3時間という短いものであったが、その間に、野鳥35種、昆虫47種、植物95種(うち在来種36種)を確認。特記すべきは、繁殖こそ確認できなかったが、複数のコアジサシや巣材を運ぶ姿も見られたし、チョウゲンボウ・ミサゴなどの猛禽類に毎回遭遇できたことである。

大阪府・市は「生きものに対しては慎重にしかるべき環境アセスメントをする」と明言していたが、その前に土地造成工事を開始してしまった。生物多様性推進委員会ではワークショップ終了後も、今後どのように変化するかかわからない自然環境なので、現状を記録しておかね

ばと、とりあえずは夢洲の生きもの観察を継続することにした。まず9～10月で5回実施。そのうち2回は1区に自然史博物館の学芸員と共にいった。この時7月の調査で自然史博物館に持ち込んだが、完全に確定できなかった水草も現地での繁殖を確認できた。

夢洲内の干潟面積はどんどん減少し、以前よりずっと悪条件と思うのだが、9月の渡りのシーズンが始まると、シギ12種、チドリ7種、カモ12種、サギ類や猛禽類などほかの野鳥も合わせ60種を超える野鳥を確認した。私たちがほんのわずかな時間、垣間見ただけの夢洲であっても、これだけの遭遇がある。実際はどれだけ多様な生きものがこの夢洲を利用しているのか、想像がつかない。ミサゴ、チョウゲンボウなど生態系の上位にいる猛禽類が毎回複数見られるのは、良好な生態系ができてきているからだろう。

夢洲の夏は過酷である。木陰が全くない。車のダッシュボードにほ

んの5分置いていただけのスマホは「高温注意」を表示し動かなくなった。夏季ここに多数の集客をすることは狂気の沙汰だと人間の体は悲鳴を上げるが、行くたびに意外なほどたくさんの生きものに出会える。生きものたちが優雅に寛いでいるその情景に、ここがゴミでできた人工島「夢洲」であることを忘れ、大阪湾に浮かぶサンクチュアリだと錯覚してしまうほどである。

保全協会として、夢洲の未来をどう描くか

大阪市は2018年「大阪市緑の基本計画」で舞洲・咲洲・夢洲を「緑化重点地区」に指定、夢洲の「西岸の水辺を砂浜と干潟にする」としている。しかしその計画は現在ストップし、再開予定は2023年とのこと。

人工島夢洲の自然は本当の自然ではない再生した二次自然だとはいえ、その回復力は目を見張るほどだ。生きものたちにゴミの化学物質の影響はないのだろうか？ ふと



写真-4 夢洲から六甲方面を望む



写真-5 夢洲南岸の海岸沿い堤防



写真-6 池には何種類もの野鳥がっしょにいる(写真 磯上)



写真-7 塩性湿地特有のウラギク(環境省準絶滅危惧種)

心配になるが、これは長い時間かけて見続けていかないと答えは出ないだろう。それよりも、渡りの中継地や繁殖地を失い、個体群を維持できなくなるほうがダメージが大きいかもしれない。

「尾瀬や屋久島の自然を守ろう!」というのは、賛同を得やすい。でも、私たち大阪自然環境保全協会はなぜ『身近な自然を大切に』と主張しているのか?身近な自然はいつもあるのがあたりまえで気にならなけれど、ある時その環境がなくなると、ごっそり、あっという間に、普通に見られた生きものがいなくなってしまう。そして、失って初めてその大切さに気づく。けれど、環境ごと回復しなければ、それらは決して戻ってはこないのだ。だから身近な自然にいつも目を配っていて欲しい」。そういうお話を25年前に聞いて

た。里山保全を市民運動として普及させた木下陸男副会長(当時)の講義だったかと記憶している。

保全協会は、夢洲の隣、咲洲の干潟に南港野鳥園を作る運動から発展した市民団体である。大阪湾沿岸部では、尼崎の21世紀の森作り、西淀川区の矢倉海岸、堺の第7-3区共生の森が、自然再生が現在進められているが、夢洲はそれらの中ほどに存在する。甲子園100個分の夢洲を自然再生すれば、大阪湾には大きな緑地帯を生み出すことができる。それは、渡り鳥や生きものたちのためだけでなく、ヒートアイランド防止効果や空気清浄機能、防波堤・防潮堤という防災機能としてなど、私たち都市住民の大きなメリットになりうる。

地球では温暖化が進み、世界を眺めれば、植林しても植林しても

植物が根付かない場所はその中にある。しかしこの夢洲では1カ月の間に見違えるほどの植物が生い茂っていき、勝手に生きものが棲みついてくれるのだ。このたぐいまれな自然再生能力に、私たちが少し手を貸し、あるいは下手な手を加えないことで、私たち人間も未来、大きな恩恵を受けるにちがいない。

今世界ではSDGsが掲げるターゲットが共通認識となっている。持続可能な社会の基盤は生物多様性などの自然環境の豊かさにあるとしている。協会はすでに半世紀近く、同様の考え方で動いてきた。今後ますます問題が深刻化するだろう環境問題へのひとつの手がかりとしても、「夢洲」は一つのモデルケースである。自然環境の創生をめざした具体的活動へと展開したい。